

時評

ダム問題の災いと福 歴史的観点から水利運用

久しぶりに出雲を訪ねた。飲み仲間が町長職についたので、お祝いかたがたそれを口実にのう一杯飲もうという魂胆である。帰路、「たたら製鉄」の工房を見学した。木炭と砂鉄で作る古来の製鉄法で、明治時代に高炉による近代製鉄が取り入れられるまでには主要な製鉄法であった。今でも日本刀などにはこの西方で作る玉鋼の生産に欠かせないという。

ただし、たたら製鉄は大量の木炭を消費する上、「かな流し」と呼ばれる砂鉄採りが多量の土砂を川に流し洪水を引き起こすとの理由から、環境破壊の現況であるかのように言われ、今では技術継承のためだけに細々と行われているに過ぎない。

森林破壊に洪水、といわれるとたたら製鉄にはたしかに負のイメージがある。出雲を流れる斐伊川は古来暴れ川で、洪水のたびに多くの人命や財産をうばってきた。とくにその中、下流域では川は天井川となり、ひとたび大雨になれば大水害はまぬかれなかったようだ。

斐伊川の土砂の堆積量はものすごく、今の島根半島も、かつては島であったものが地続きになったのも主にその土砂のためといわれる。出雲神話の「国曳き神話」はこうした歴史を反映したものだと、寺田寅彦も考えていたようだ。出雲の国づくりは、考えようによればその多量の土砂流下なればこそといえなくもない。

そればかりか斐伊川と流下した土砂は多量の鉄分を含み稲作には好適である、鉄欠乏は稲作には大敵であることが経験的に知られてきた。出雲平野では、古くから水田稲作が発達し、古代出雲文化と呼ばれる文化発祥の地として栄えてきたが、それというのも土壤に含まれる豊かな鉄分にその理由の一端がある。

中国山地は風化花崗岩でできていて、少しの雨でもすぐに崩れてしまう。そのことが多量の土砂の流下を招き河口付近の砂浜をはぐくんだ。花崗岩の山では土地は痩せている。痩せ地にも合う上、燃料としたときにカロリーが高いとの理由から、松の木がどんどん増えていった。瀬戸内地方では、松は製塩にも使われた。製鉄と製塩。それは歴史上森林破壊をもたらしてきたが、いっぽう「白砂青松」という海岸の景観はこうして形つくられてきたものである。

このように考えてみれば、土砂の流下という現象は必ずしも悪いことばかりとはいえなくなる。それは確かに洪水と不可分の関係にあるが、かといって土砂の流下を全部とめてしまえばどうなるか。静岡県民は、三保の松原の衰退という形でそのことの弊害を仕っている。水利は、下手に運用すれば伝統文化を壊すことがある。

政権交代で今日はダムについて関心も高いが、こうした歴史的観点からダム問題と考える直すことも大切なことではないだろうか。災いと福とは、このように、常に裏腹の関係にあるのである。